

事例1 インターハイ予選において

個人戦において、ジャッジに関するクレームが数回あり本部より、コート付きのロービングに入ったが、それに対してもクレームを付けた。

今回の問題点

ジャッジに関しては、もめることは多々あるが、ロービングが入ってきた際にもそれが続いたこと。

今回の措置

ルールブックに基づき対応。

ルールに関する今後の措置

ルールではロービングアンパイヤーのジャッジが最終であり、選手はそれに従わなければならない。あまりにもしつこい場合などは、倫理規定に該当する

事例2 近畿予選において

試合中で選手が怪我で出血し、止まらない様子で棄権の意思を相手選手に伝えてきた。その内容をロービングからトランシーバーで連絡を受けたので、返答で出血が止まらない場合は棄権となり、試合を再開されるためには完全に出血を止めてくださいと指示。

今回の問題点

出欠の際には試合はできないということ。それを選手の保護者らしき人物が本部にクレーム。

今回の措置

ロービングから指示をしてもらい、出血を止めて試合再開。

ルールに関する今後の措置

ルールに従って処置。本部へのクレームは適切に説明。

事例3 近畿予選において

ゲームカウント5-5で第11ゲームでタイブ레이크を行った。

今回の問題点

タイブ레이크を行うゲームの間違い。

今回の措置

第11ゲームの結果でゲームカウント6-5で終了とした。

ルールに関する今後の措置

以前のルールでは第11ゲーム目をタイブ레이크で行った場合、第12ゲーム目はスタンダードゲームに戻し、間違いの訂正させ進行させたが、現在ではタイブ레이크を行った場合をそれが最終となる。以前まではゲームセットと双方のプレーヤーが確認しても間違いだった場合訂正して試合を再開していた。

事例4 全国選抜において

試合を勝手にノーアドバンテージで進行させていた。

今回の問題点

試合前の諸注意でも伝えていたがそれで何ゲームか進行した

今回の措置

間違いがわかった時点で訂正し正しい試合方式にした。

ルールに関する今後の措置

ルールブックに従う。ただし京都府においては協会の大会の含めて、予選をノーアドバンテージで行う事が多くなっている。ジュニア選手の感覚がノーアドバンテージが普通になっている。諸注意でしっかり徹底すべきである。

事例5 公立校大会において

試合中一方の選手がノットアップと思われるプレーがあったが、そのままラリーが続いてその後カウントがわからなくなった。

今回の問題点

ノットアップであったにもかかわらず数回ラリーが続いたこと。

今回の措置

ロービングアンパイヤーがノットアップとカウントを確認して試合を進行させた。

ルールに関する今後の措置

ルールブックに従う。

ノットアップとタッチは申告制である。該当プレーヤーは申告が無く疑わしい場合相手選手は確認することができる。今回はその確認がなかったことから、本来であればノットアップはなかったと判断される事例である。

事例6 ウインタージュニアにおいて

ゲームがタイブレイクに入り、双方の選手がエンドチェンジを全くしないまま、カウントが7-6まで進んだ。

今回の問題点

双方の選手が全く気づくことなく、ポイントが進んだこと。

今回の措置

ポイント有効。正しいポジションで試合再開

ルールに関する今後の措置

ルールブックに従う